

## 小・中一貫教育校における交流及び共同学習の在り方

秋田県鹿角市立大湯小学校 教諭 佐々木 高広

### I 実践に当たって

秋田県でも数少ない小・中一貫教育校である、小坂町立小坂小学校・小坂中学校での実践の様子を紹介する。昨年度まで2年間勤務していたが、小学校、中学校それぞれで特別支援学級との交流が行われているだけではなく、小学校5・6年生と中学校1年生による交流も行われている。もちろん、小・中学校全校で取り組む合同大運動会などの行事も多くあるが、他にも工夫を凝らした交流活動が行われている。



### II 実践内容

#### I 校内での交流及び共同学習

##### (1) 通常学級との授業（体育、音楽等）

担当する自閉症・情緒障害学級の児童が2年生1人であったためT1として授業を行った。特別支援学級の児童は、中学校の保健体育教師に支援してもらった。低学年ではあったものの、自身も中学校での指導経験があったため、運動の基礎・基本として「〇〇遊び」の中にも9年間の系統性をもたせて指導することができた。子ども同士の交流及び共同学習だけではなく、教師自身も小・中学校の見通しをもって指導することができたとてもよい機会であった。



スキー授業は、学校裏の中央公園とその奥にある陸上競技場を使って行われた。1年生のコースに陸上競技場の周回コースが加わった長さのため、スタート・ゴールは1年生と共通ということになり、見通しをもちにくい特別支援学級児童にも安心感を与えることができた。

音楽の鍵盤ハーモニカ演奏では、楽譜の読み方や鍵盤の位置、息を吹き入れてからタイミングよく鍵盤を押すなどの練習を特別支援学級で行ってから音楽室に向かった。多動傾向の児童だったが、教室が隣だったこともあり、途中でうまくいかなくても教室に戻って練習することが容易にできた。

##### (2) 特別支援学級同士の交流及び共同学習

小学校特別支援学級同士の合同授業では、知的障害学級児童2人と一緒に授業を行った。1年目は、月曜朝に給食のエプロン畳みを中心に自立活動（知的障害学級は生活単元学習として）を行った。もともとは給食委員会の活動であったが、指先の巧緻性を高める練習とみんなのために働くという意識をもたせるというねらいで始めた活動であった。さらに2年目には道徳の授業を合同で行った。2・3・4年生が一人ずつであったため、それぞれの教科書をミックスさせながら自分の気持ちを表したり言葉の使い方を確かめて互いにロールプレイしたりと、楽しく行うことができた。

小学校と中学校の特別支援学級の合同授業では、毎週水曜日の5校時に時間割を固定してもらい、中学校の特別支援学級（知的障害、自閉症・情緒障害の各1学級）との交流及び共同学習を行った。子どもたち同士で計画を立て、毎週何をするか見通しをもって授業を進めることができた。大きなテーマとして小・中学校の先生方や交流学級の友達を招待することを念頭においた「喫茶店を開こう」や、特別支援学級の活動を全校に紹介することを兼ねた「思い出アルバムを作ろう」などを計画した。活動内容として、特別支援学級の畑で育てた作物を使ったメニューを考えたり、地域の喫茶店を訪れて

店内のレイアウトを観察したり接客の様子を学んだりした。また、互いをより深く知るための「自己紹介をしよう」や、体の調整力を高める運動を取り入れながら行う「仲良くゲームをしよう」などの取組も行った。

### (3) 学校全体での交流及び共同学習

全校で一番大きい行事は「大運動会」である。小学校1年生から中学校3年生まで単独で行う徒競走の他に、ホップ学団（小学校1～4年生）、ステップ学団（小学校5・6年生・中学校1年生）、ジャンプ学団（中学校2・3年生）と、それぞれ学団ごとにミニ集会や練習会の時間を設けている。また、小・中それぞれのダンス、全校で踊る「小坂音頭」（コロナ禍以前には、応援に来ている保護者や地域の方にも呼びかけて一緒に踊る）など、盛りだくさんである。

全校ボランティア活動である「フラワーデー」では、花を植えたプランターを玄関の周りに設置し、水やりなどの世話をしている。（近くにある歴史的建造物である「康楽館」通りの植樹にも参加している）



## 2 他校との交流及び共同学習

### (1) 支援学校との交流及び共同学習

鹿角地区には比内支援学校かつの校があり、卒業生も数名お世話になっている。また、進学のための学校見学（体験入学）だけではなく、毎年のように見学に訪れて一緒に授業を受ける機会をもっている。

基本的にかつの校の小学部、中学部の授業と一緒に参加させていただく形をとっているが、可能な限り事前に授業内容を教えてもらい、自分たちから授業に取り組んでいるという意識をもつことができるように配慮している。また、次に述べる「鹿角なかよし交流会」に向けて、担当種目「ボッチャ」の打合せや練習をする機会をもつことも計画した。

### (2) 鹿角全体での交流及び共同学習

鹿角郡市内の特別支援学級児童生徒が集まる「鹿角なかよし交流会」は、15年以上の歴史があり、参加者の実態やニーズに合わせていろいろ変化しながら続けられてきた一大イベントである。始めの頃は、12月のクリスマスに合わせて「合同クリスマス会」的な内容であったが、徐々に参加者の目的意識や単元計画が確立され、季節のイベントで終わらない系統性のある形へと変わってきた。

内容は大きく四つに分かれ、「始めの会（自己紹介）」「ゲーム（交流）」「歌と合奏」「終わりの会」という流れで行われてきた。鹿角を隣接校同士四つのグループに分け、それぞれを分担しながらローテーションで回る形をとっていた。（昨年度から交流をメインに時間を取る形にしたため、「歌と合奏」は削除した）

「始めの会（自己紹介）」では、各学校（小学校7校、中学校5校、支援学校1校の計13校）ごとに自己紹介を行い、その後名刺交換で個々の触れ合いの場を確保した。低学年など関わりが困難な子どももいるが、小・中学校9年間を見通して参加することができるので、自然と参加できるようになったり紹介の仕方が上達したりと、自校の児童生徒だけでなく、他校の子どもたちの成長も感じとることができる。



「ゲーム（交流）」では、4グループごとに工夫を凝らした内容を準備し、時間で区切って全部回る形式で行っている。昨年度は、花輪地区が「ペットボトルピン倒し」、十和田地区が「ペットボトルボウリング」、尾去沢・八幡平地区が「玉入れ」、小坂地区&かつの校が「ボッチャ」を行った。各グループでゲーム運営の前半・後半を決め、前半にゲーム運営をした人は後半にゲームをし、前半ゲームをした人は後半にゲーム運営をした。

「終わりの会」では、感想発表を行って簡単に振り返りを行った。以前は、鹿角市のイメージキャラクター「たんぼ小町ちゃん」が登場してプレゼントをもらったり握手をしたり、記念撮影をしたりといったことも行っていたが、参加人数が増えたことによる時間短縮等の理由からカットされた。楽しみにしていた児童生徒も多かったが、コロナ禍ということもあってみんな納得できたようであった。

上記のなかよし交流会に向けて、各地区で打合せを行ったり合同で練習の機会をもったりと、いろいろ工夫を凝らして取り組んでいる。小坂地区は小・中いつでも一緒に練習できたが、かつの校との練習は昨年度はできなかった。そのため、どちらの学校でも取り組んでいる「ボッチャ」を小坂地区担当のゲームにしてもらうように理事会等でお願いをし、前半に小坂小・中で運営をし、後半にかづの校へバトンタッチすることにした。運営（ゲーム紹介等）については、大まかなルールを共通して設定した後、説明の仕方や流れについては各校で工夫して行うことを確認した。

他地区（花輪、十和田、八幡平・尾去沢）については、それぞれ電話やメールでやり取りをして役割分担を決めたり各校で練習を行ったりしてきた。さらに、四つのゲームについて事務局でまとめて全参加校にメールで伝えてもらった。（各校で児童生徒に連絡してもらい、必要に応じて練習することにも役立った）

### Ⅲ 成果と今後の課題

#### Ⅰ 成果

どの学校の特別支援学級も多くて5、6人、少ないと1人という状況で、交流及び共同学習の意味合いは大変大きいものである。また、少子化に伴い、児童生徒数が減少して単級の学校が増えることにより、集団生活の中での指導ということが、ますます難しくなってくる。その中で、学校の枠を超えて地区や鹿角全体で取り組んでいくことができたことは大きな成果であった。

日頃、同学年の中でなかなか力を発揮する場面がなかった児童生徒にとっては、9年間に渡る異学年によるグループ活動は、先を見通す力を養うとともに、年下の世話をすることによって思いやりの心を育むことにもつながることができた。また、他校との交流は、最初関わり方に不安をもっているが、回を重ねるうちに参加できるようになったり、自己紹介の仕方が上手になったりと、自校の児童生徒と同様に、他校の児童生徒の成長を感じることができたことも大きな収穫であった。

#### Ⅱ 今後の課題

自校内の技能系教科（音楽、図工・美術、体育、家庭等）を中心とした交流及び共同学習はどの学校でも積極的に行われているが、国語、算数・数学、理科、社会、英語（外国語）については、障害の度合いによって違いがある。ただ、週の半数以上は特別支援学級で指導することが原則になっているので、今後インクルーシブ教育を念頭に置きながら、障害のない児童生徒とのより豊かな関わりにつながる取組も工夫していかなければならないと感じている。

単なる交流ではなく共同学習として考えていくなれば、通常学級の児童生徒との関わりを容易にするためにも特別支援学級の年間指導計画を通常学級と共通して作成した上で、柔軟に対応していく必要があると感じている。通常学級の担任が、障害のある児童生徒の実態や目標を把握しないままに指導を行っているのは、本人の理解はもとより支援内容や手立ても分からないままに指導を行うことになりかねない。特に、情緒面で特別な支援が必要な児童の場合、通常学級の児童生徒と同様に一斉指導が中心となってしまうと、不適応を起こしてしまうこともある。クールダウンでその場から離れることも許されない場合もある。いずれ、どの子も満足に学校生活を送ることができるよう、交流及び共同学習を模索していく日々は何年経っても変わらないし、それが教師の役目だとも感じている。